

子どもの発達支援と保護者へのアプローチ

岡崎達也

(公社)京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員統合育成担当

現代の子育ては、不安要素が非常に大きくなってきている。保護者は時間に追われ余裕がなく、また情報過多で、その情報に振り回されがちだ。保護者は様々な面で、やり過ぎたり(過保護等)、やらなさ過ぎたり(ネグレクト等)と二極化が懸念される。

発達特性を持つ子どもは「育てるのにコツのいる子ども」(中京大学 辻井正次教授)と言い換えられる。乳幼児期は、その子の特徴を理解してどう付き合うか、どう対応したらいいかということ、一緒に考えるようにすることが支援となる。子どもがわがままだ、保護者のしつけができていないといった、子ども自身や保護者の育児の問題と捉えるのではなく、親の大変さに共感し、専門職として親の困りに対する子育てのコツを見つけ、寄り添った支援をしてほしい。特性のある子どもを育てるのは、日本の従来の育児とミスマッチしやすく、保護者も疲弊していることが多い。まずは、その子のプラス面に目を向け伸ばす、誤った対応によってこじれさせないようにしていくということが、大事なポイントになる。睡眠や食事に関する問題や、抱っこを嫌がる等の困りがある場合、特に保護者はしんどい。

相談機関へつなげる際には、保護者が決断する必要があるが、近年は、小さい子どもを見る機会が少なく自分の子どもが物差しになっているため、我が子の問題に気付きにくい場合がある。また、我が子の姿を問題だと認めたくない親もいる。親の思いを理解しつつ、「子どもが困っている」と言う視点で話をすることが大切だ。児童館や子どもはぐくみ室等地域の身近な場所でも、相談事業や子育て支援事業を実施している。児童相談所だけでなく、ハードルの低い身近な相談機能を利用することも、支援とつながる足掛かりとなる。地域の関係機関について、どのような機関があるか、どんな機能を持つのか等を知っておくことが重要だ。顔の見える関係になっておけば、さまざまな相互連携ができる。ただ、保護者には、相談機関と連携するための許可を必ず取ってほしい。

子どもは困った場面によって行動のアクセル(多動等)を踏んだり、ブレーキ(過緊張等)を踏んだりする。また、園と家庭、父親と母親の前では、見せる姿が違うということもよくある。「対応がまずいからそうなっているのでは」と、互いに責任転嫁するのではなく、違いのある子どもの姿を共有することが最も大事なことだ。しかし、保護者と話す時は、診断用語は使わない。診断が出来るのは医師だけである。

就学の際は、小学校や総合支援学校ではどんな支援があるか等知っておくことが重要だ。京都市の支援の連携ツールとして、個別支援ファイル(相談機関で得た情報を集積して、次の相談の場面に役立てるためのファイル)や就学支援シート等が活用されている。就学時には、学校だけでなく学童保育とも是非連携してほしい(就学支援シートを学童にも送る等)。また、保育者が記載するアセスメントシートとして、TASP(タスプ) CLASP(クラスプ)を紹介する。これらは、今後の支援に活かすため、あるいは、保護者が次の相談のステップを歩むために活用できるツールとなる。

発達特性は、生まれてからずっとその子が持ち合わせている特性であり、変わることはない。集団生活に入る頃から、だんだん周りとの軋轢や行動上の問題が出てくることがあるが、その際の対処を誤ると、メンタルヘルスの問題となってしまう場合もある。ライフステージを通じた切れ目のない支援が求められている。思春期以降もメンタルヘルスの問題に直面しないようにするためには、乳幼児期の支援が重要であり、その支援を次のステージへつなげていくことで子どもが生き生きと生活できれば本当にうれしい事である。